
手紙

坂田竜馬

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

手紙

【Nコード】

N3115P

【作者名】

坂田竜馬

【あらすじ】

突然引越すことになった初恋の人に「僕」は手紙を書くことにしたが・・・

「残念なお知らせです。由美ちゃんが家の事情で転校することになりました」

それを聞いた時僕は三日ぶりに会った後ろの席の友達とゲームの攻略法についてくだらない話をしていた。だが教壇の前に立つ先生の言葉は、まるでゴーゴンの目でも見たかのように一瞬で僕を硬化した。なんだって？転校？そんなわけないじゃないか、彼女は今僕の右斜め前の席に・・・座ってない。そこは無造作に置かれた椅子と机があるだけだ。

何時の間にか教壇の前に移動した由美ちゃんは、俯きながら話をしていた。僕は未だに由美ちゃんを見ながら固まっていた。さっきまで無かったはずの風が左側から吹いてくる。いつもは気にならないはずのクラスメイトの話し声が今日は良く澄んで聞こえる。テレビでもよく見ることのあるアイドルグループの話や身に纏っている自称お洒落で可愛い洋服の自慢話。今の僕にはあまりにどうでもいい。由美ちゃんは何を喋っているんだ。

耳に神経を集中させても彼女の声は聞こえない。まるでよくわからない何かが耳の手前で彼女の声のみブロックしているみたいだ。

「残り一週間はみんなで由美ちゃんと素敵な思い出を作ってあげましょう」

先生の金八先生のような低い声が僕の意識を解放した。一週間？少なすぎる。せめて一か月ほしい。

僕は由美ちゃんとともに喋った事は無い。でもいつの間にか好きになっていた。特に意識もしてないのに一緒に東京の大きい映画館で宇宙人と戦うアクション映画を見る夢を見た時かもしれない。僕がわからない国語の漢字問題を彼女が黒板にスラスラと書いていたときかもしれないし、運動会で50M走を一着で走り抜けた姿をたまたま視界に捉えた時かもしれない。

どの瞬間かすらわからないが、おそらく一目惚れだ。だって話したことのない人に好意を抱くなんておかしいじゃないか。だけどそれは心の底に隠していた。恥ずかしいし、「恋」がどんな感じがよく知らなかったから。その感情を放置して進展も無いまま小学校を卒業するのだろうと思っていた矢先だ。シヨックかも知れないし、逆に告白するという事実は変わらない、どこに行くかなんて知らないが恐らくどこか遠い所だろう、もう二度と会わない。

いや、会わないならむしろ好都合じゃないか。あとで友達にばれて笑い話にならなくて済む。そのまま僕と彼女しか知らない秘密になるんだ。よし、やってみようじゃないか。やらない後悔よりもやる後悔の方が断然いい。母親が毎週欠かさず見ているベタな恋愛ドラママでも確か言われていた。

直接言うのは恥ずかしいから手紙にしよう。そう考えてからはその日の授業はまるで耳に入らなかった。どう書くか、少しカッコいい言葉でも入れてみようか。そんな事しか考えていなかった。そういえば先生に当てられて間違えた時由美ちゃんが笑ってくれたっけ。些細だけど嬉しいな。

午前の授業も昼休みも落書きだらけの机に向かっていた。いつも昼休み一緒に遊んでいる友達に怪訝そうな目を向けられた。その一人に話しかけられた。「まさか勉強？」仮に勉強だとしても何で意外そうな顔をしているんだ。

学校が終わり、いつもより早足で帰って手も洗わず机に向かった。そこは読んだ漫画で埋め尽くされていた。はあ、まずは掃除か、片づけるのが面倒くさくて、ついにほとんど空のスペースとなっていた本棚にそれらが無造作に入れていく。そのとき夕食の買い出しから帰宅した母親が心配そうに僕の掃除を眺めていた。「熱でもあるの？」とでも言いたげに。

それからが大変だった。まるで言葉が思いつかずに最初に何を書けばいいのかすら思い浮かばず、夕食の好物のはずのカレーもさっさ

と平らげ、すぐに風呂にも入り

完成した。三日も掛かった、渾身の手紙だ。長いわけでもないし、洒落たペンで書いたわけでも無い。ノートの切れ端に赤いボールペンで綺麗に、要点を纏めて書いたつもりだ。何回も読み返したし、間違いがあればまた新しい切れ端に書いた。

でも、いつもより早く来たはずの朝に、直接渡せなかった。僕に度胸が無いからだ、十中八九そうだ、間違いない。

右斜め前にいるはずの彼女よりも教壇の目の前に構えている友達の方が近く感じた。左の窓から吹いてくる風は昨日より冷たく、冬の本格的な到来を感じさせた。

授業中はずっと机の上にドサツと置いてある教科書と、真剣な目で授業を受けている由美ちゃんを見ていた。時々黒板にも視線を移したが、すぐに由美ちゃんに戻った。

もう駄目だ。渡そうと決めると緊張と不安が僕を押し潰そうとしてくる。そしてそれを紛らわそうと友達とまた話を始める。リュックの中でまだかまだかと手紙が怒鳴ってる気がした。

そしてその日の放課後、誰もいない教室で一人残り、彼女の机に手紙をそっと入れた。そして逃げるように全速力で帰った。外は教室よりも寒く、向かい風はさらに冷たかった。

僕は駄目な男だ。友達は僕を「面白くて頼りがいがある」と言ってくれたが、正反対だ。度胸も無く、特にできることも無いつまらない人間だ。こんななら書くんじゃないかった・・・

そして僕は逃げた。次の日、金曜日を休んだ。仮病だ。由美ちゃんに会える最後の日。それを放棄した。まるで負け犬だ。

その日はゲームを一日中やっていた。飽きたらすぐ他のゲームに変えた。暇な時間があると、思い出してしまうから。

今頃学校はどうだろう。由美ちゃんのお別れ会でもしてるのかな。由美ちゃん手紙見たかな。

忘れようとしてもその感情は取り留めなく溢れてきた。

月曜日。いつもなら久しぶりに会った友達とさまざまな会話で盛り上がるだろう。でも今日はそんな気分になれなかった、登校してすぐ机に突っ伏していた。あれは思い出してはいけない・・・ふと、机の中に見慣れないものがあるのに気付いた。・・・紙だった、派手な色で飾られた紙に、見やすい青い文字が綺麗に少しだけ並べてあった。

「直接話したいです。今日の放課後この教室に来てくれませんか？

由美」

それだけ書いてあった。・・・ああ、僕は何で逃げたんだ。きつと彼女は金曜日に僕の手紙に気付いて書いてくれたんだ。でも僕は休んだ。直接話せる機会を目の前で放り投げたんだ。由美ちゃんも人が悪い、話したかった事も書いて入れてくれればよかったのに。それとも忘れて書き忘れたのかな。

誰にも気付かれないようにその紙をポケットに入れた。そして気づかれないよう泣いた。今日は休校じゃないのか。それほど静かだった気がした。

あと三か月もすれば卒業だ。耐えられる気がしなかった。でも、全て終わった。そうだ、他に好きな人でも作ろう、由美ちゃんみたい

にいつの間にかできるだろう。

僕の「初恋」と呼べるかわからないが、それは誰にも気付かれることも無く、ひっそりと幕を下ろした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3115p/>

手紙

2010年12月5日09時25分発行